

(有)佐々木石材工業(旭川市神居5条1丁目、佐々木彰宏社長)は1958年創業で、これまでに2万基以上の墓石工事を行っている。鷹栖町工業団地にある自社工場では原石から石の切り出し、研磨加工、文字彫刻を行い、本社隣には屋内・屋外の墓石展示場があり、同社の技術を間近に見ることが

できる。
お墓参りが集中するお盆を間近に控え、墓石デザイナークターでもある同社の佐々木寛太郎営業部長に、最近のお墓事情や自身のお墓への思いを聞いてみた。

お墓参りに勝る教育はない

佐々木石材工業 佐々木寛太郎営業部長

最近ではテレビや週刊誌の影響で「墓離れ」「墓じまい」という言葉が独

り歩きしている状態のように思えます。旭川はじめ自治体が合葬墓をつくる動きも多くなってきましたが、「墓じまい」については、社会がもう少し慎重になるべきだと思います。

お墓に勝る情操教育や道徳教育はありません。子どもたちが、ご先祖様のお墓を磨き、手を合わせる親の姿から学ぶものはとても多いのです。あの尾木ママが監修した全国調査でも、お墓の前での供養経験が子どもたちの思いやり、優しさに大きく関連していることが分りました。

(※昨年、日本香堂が全国の中高校生1200人以上を対象に調査したところ、お墓参りや仏壇に手を合わせる頻度によって「他者へのやさしさ」にかなりの差が出た。また、教戒師が受刑者に行ったアンケートでは98%が墓参りの経験がないという結果が出ている)

最近では、墓守(はかもり)となる息子や娘に負担をかけたくないと思う遠慮しがちなシニア世代が

を合わせる頻度によって「他者へのやさしさ」にかなりの差が出た。また、教戒師が受刑者に行ったアンケートでは98%が墓参りの経験がないという結果が出ている)

最近では、墓守(はかもり)となる息子や娘に負担をかけたくないと思う遠慮しがちなシニア世代が

告をし、今後のお願いごとをするのもいいかと思えます。大事な子孫をきつと良い方向に導いてくれるはず。願いが叶えばご先祖様のおかげ。悪いことが起きても、もっと悪くなるところを

先祖様が最小限に抑えてくれたと考えるとよいでしょう。
私自身も30歳で胆石が発症し激痛で苦しみ、胆嚢ごと摘出しましたが、胆管がんで亡くなった祖父が胆嚢を摘出するよう導いてくれたのかなと思つています。そう思うとあの時の激痛も逆によりがたみになります。
最近8歳の息子が曾祖父のことを聞いてくるようになり、曾祖父に会いたいとも言うようになり、私の記憶の中の祖父を息子に伝えていきます。それが息子のアイデンティティの一部にもなつてくると思います。

